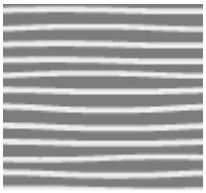
HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聞き書き 小別沢 : 北海道札幌市小別沢地区の生活誌
Author(s)	北海道大学文学部・宮内泰介ゼミナール
Citation	1-74
Issue Date	2017-05-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65761
Type	book
File Information	kikigaki_kobetsuzawa.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

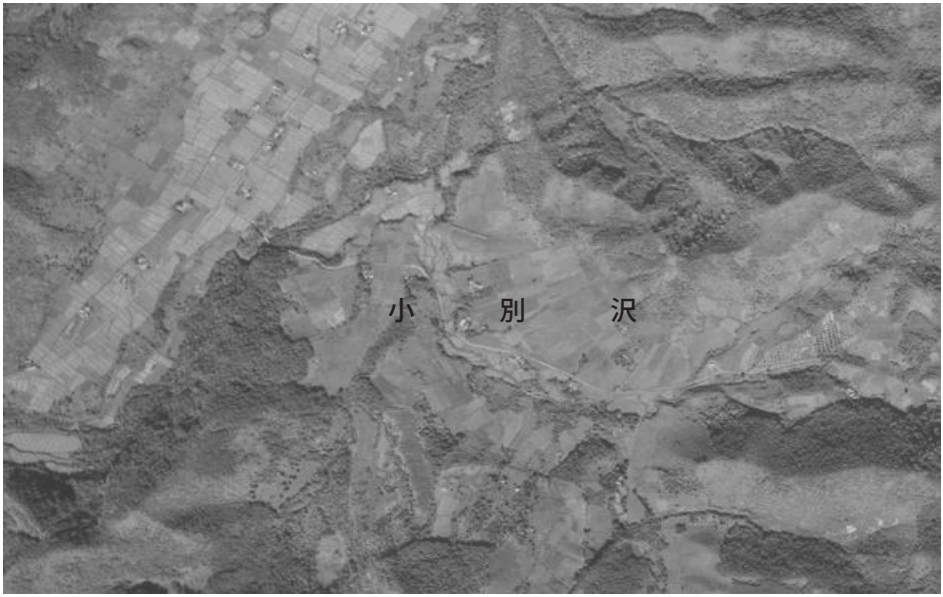


聞き書き　小別沢

北海道札幌市小別沢（こべつざわ）地区の生活誌

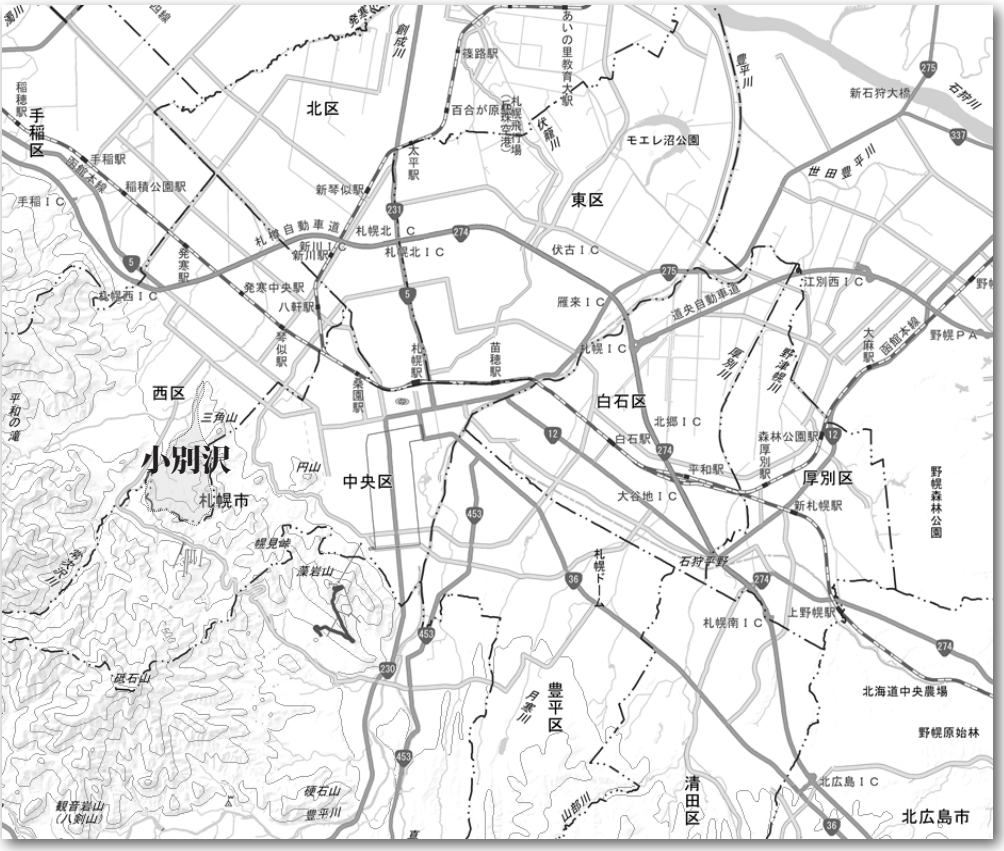
編集　北海道大学文学部・宮内泰介ゼミナール

1947 年航空写真（国土地理院）



2008 年航空写真（国土地理院）

小別沢の位置



（国土地理院地図（電子国土 Web）をベースに作成）

目次

ほんとにつらい時もあったけど、それでも負けはしなかった　――谷口昭仁　5
畑で仕事しているのが楽しいの　――谷口よしの　10
馬に食べさせるものを作るだけでも大変だった　――佐藤勝馬　17
中学の時から農業の仕事をしてきました　――伊部義幸　33
あのころは若かったから仕事を二つ三つ同時進行で出来たんですね　――伊部恵美子　40
親の手伝いをしないと、げんこつが飛んできた　――漆崎 智　47
16歳のときに青森から来ました　――漆崎あい子　53
ずっと2、3時間しか寝ないような生活が続いたよ　――橋場 操　59
小さいながらも大根を積んでトラクターを動かしていました　――三輪寿子　66

小別沢の歴史　24
円山朝市とは　30

谷口昭仁さん（昭和9［1934］年生まれ）

ほんとにつらい時もあったけど、それでも負けはしなかった

強制的に疎開させられた

昭和20年にここに来たんですよ、小学校5年生の時。もとは豊平（札幌市豊平区）にいたんです。豊平の1条9丁目ですね。ちょうどそこが豊平製鋼（「豊平製鋼株式会社沿革」によると、昭和12年に合名会社野口製鋼所が札幌市豊平1条9丁目に創業、鋳鋼製品の生産を開始）になってね。戦時中で鉄工所だった。軍事工場だった。それで強制的に疎開させられてね、ここに来た。親戚頼ってね。そりゃ移るたって車なかったからリアカーに家財道具積んでね、このトンネルの山を。俺が5年生。弟が2年生。それでリアカー引っ張るの。戦争当時だから空襲警報かかってね。大変だったの。（山道だから）まっすぐひっぱって上がれないから。

人に負けない意地があった

お金がないから、防空壕みたいのをここに掘って、6畳間くらいの。8男1女の兄弟だった。俺が六男。兄貴たちはみんな兵隊に行って当時はいなかった。親2人と子供4人と6人で6畳間の防空壕で、ぎちぎち。風呂も作ったりしてね、釜の五右衛門風呂。4、5年でやっと家を建てた。薪ストーブだったけど。開墾したら、伐採したのを薪にしたりね。

当時は食糧難だったでしょ、だから、ここに来て荒れ地を耕して。僕らもね、5年生だったけど、当時は毎日その仕事。みんなで開墾。荒れ地を伐採して。比較的平らなところは元の農家の人たちが畑作ってるから。

11月から2月は出稼ぎ。山行って大木伐って。請負だからね、やるだけお金になったわけ。俺小さい体でしょ。だけど人よか遅くまで仕事すれば稼げるわけ。それで人に負けない意地があった。結局お金がないからお金を稼いでこないとダメなんだ。

よくスキー滑ったもんだ

俺だけだもん、高校行けなかったの。兄さんたちは兵隊行って。兵隊行く前は国鉄に勤めてた。みんな給料取り。弟も国鉄職員になった。

学校は琴似中学校盤渓（ばんけい）分校だね。ここから峠越えてだから1時間近くかな。子供の足だからね。冬はスキーでね。橋場さんの山のところでジャンプ台作って、よくスキー滑ったもんだ。スキーは新品なんて買えないから、古いのもらったり。自分らでコース作って走ったりね。

自分で食べるのが精いっぱい

農家はもう親父がお前やれっていうから、はいはいって。仕方ないっていうか当時はもう食糧難だったしね。お金もないし。馬も持てないくらい貧しかった。今思うとね、馬使ったりするような畑もなかったんだ。明けても暮れても開墾ばっかり。そのころは馬鈴薯とかカボチャとかね。とにかく開墾したらもうかぼちゃしかとれねえんだわ。きれいに畑うなってから馬鈴薯とかとうきびとか作れるけど。当時は自分で食べるのが精いっぱい。母親は、もう食べ盛りの子供たちいるから、コメ農家に働きに行って米もらってきて。戦時中は、米買うったって大変だったんだわ、統制されてたから。闇米しょって来たら抑えられて没収されたもん。そういう当時だったから。主食はでんぷん団子とかね。芋をしばらかして［凍らせて］ね。そんなような生活だったもん、昔は。

家内はまあよく働く

結婚してから野菜は作り始めた。昭和30年かな。家内が一緒にやってくれたから、人並みにできたけど。それまではね、厳しかったよ、本当に。家内は青森からね、出稼ぎみたいに、手伝いに隣に来たの。それでどうだってことになって。よく稼ぐ人だってことで、親も奨めるし、農家やってくんなら、と。まあ働くもん。もともと農家の娘だから。それと人にも負けない気持ちが強いから。朝起きたら子供ぶん投げて仕事行ってた。ばあちゃんが大変だった。

それでも負けはしなかったけどね

野菜を売りに出すのは、中央市場の前は円山朝市。結婚した当時までは馬だったかな。それから三輪車で持って行って。暗くなるまでとにかく収穫する。ちゃんと選別して箱詰めして量って。それがまた大変なんだ。早くから起きて、夜遅くなって。朝市行ったら、人よか早く行って場所取らなきゃいけない。俺は三輪車運転して。2時とかに起きなきゃいけないから、寝る暇ないしょ。体丈夫なほうでなかったからね。ほんとにつらい時もあったけど。それでも負けはしなかったけどね。

周りの農家は競争相手だから、何作ってるとか、何がいいとか言わないもん。秘密みたいなもん。悪い考えじゃないけど、そういうもんだ。人より早くか、人のいない時に出さなかったらいい値段が取れないの。人のより良ければ高く売れる。

ほかの人より5年くらい遅れてたんでないかな

昔から見ると楽にはなった。農機具だってトラクターとか買えるようになったのはここらへんの農家から見たら、一歩遅れてたから。今は追いついたかなって感じだけど。ほかの人より5年くらい遅れてたんでないかな。結婚前くらいに馬が買えた。

今は、他の人よかハウスもたくさんあるし、まあ、このへんでは結構収入はあるほうでないかと自分では思ってるけど。家内のおかげです。

初めてハウス作ったときは、お金ないから、ただパイプだけ買ってあとは竹とか。最初のハウスはそれだったの。それから始まって、だんだん国から補助が出るようになった。昔ここらへんの人集まって生産組合作って。

米は、国で減反するってなってからお金をもらって転作。売る分もなんぼかあったけど。当地の田んぼは土が浅いわけ。しかも砂地だから硬い。うちは植えて水張ると、浮いちゃうわけさ。ちゃんと土を寄せてやらないと浮いちゃうくらいの田んぼだったの。まあ、他よか穫れないけどおいしいコメはできた。母ちゃんのおかげです。

農業は与えられた仕事だと思ってる

苗ものが儲かったの。苗ものでかまど上げたんでないかと思うんです。こんなポッドに入れてトマトときゅうり、ナスとピーマン、あらゆる苗ものを。そういうことやったの、うちが一番早かったんでないかと思うんだ。ほんとに儲かった。三輪車で1回運んで16万円くらいになった。1日で3回くらいやったこともある。儲かるから寝てる場合じゃない。車のライトで照らして収穫したり。儲かれば眠くもないし。昭和35年あたりからやりだしたんでないかな。今はトウモロコシと馬鈴薯もなんぼか作ってる。

こんなもうかる商売なんでやんないかな。まあ、大変なことは大変だけどね。農業は与えられた仕事だと思ってる。兄貴たち給料取りだから、日曜日はゴルフだとか遊ぶしょ。おれは農家だから1日草取り遅れたり、収穫遅れたら、それだけダメになっちゃうでしょ。休んでなんかいられないでしょ。決めてやってることだから、今さら言えないでしょ。

（構成／中田星矢）

谷口よしのさん（昭和13［1938］年生まれ）

畑で仕事しているのが楽しいの

連絡船と鈍行で

私は青森の乙供（おっとも）（青森県上北郡東北町乙供）っていうところから、友達に誘われて昭和32年に小別沢へ働きに来たんです。乙供は小さい駅だから普通列車しか通らなくて、青森から急行でね。連絡船乗るったって場所とるために走ってね。連絡船から汽車に乗るったって鈍行で来るでしょ、指定席とかないから場所とるのに荷物もって走る走るで。そうやって時間かけてきたの。

食べ物では苦労した

青森は開けたところで畑は大きくて、当時はジャガイモとか豆とか、田んぼもたくさんあって恵まれていた。私たちは向こうにいたってわりと裕福だったのにね、こっちに来たら畑はこんなだし、坂だし、石もあるしね。もう、ここに来るとき、昔のトンネルは凍って滑って、どんなところに連れていくのかなって本当におっかなかった。そして来たら両方山でしょ、畑ったってどこにあるんだろう

って。

最初は江戸さんのところで奉公で働いていたけど、お米はおいしくないしね、食べ物では苦労しました。肉や魚はあんまり食べなかったと思うね。あんまりおかずおいしいもの食べたっていう感じはないね。野菜は豊富に食べてましたね。江戸さんではキャベツとかトマトとかキュウリとかほうれん草とかカボチャとか、そういうのは作ってましたからね。

江戸さんは手稲にも土地があったから、イモとかエンバク（燕麦）とか、そういうあんまり手かからないものを作って、こっちのほう間に合わせては、そっちにも車でよく仕事に行きましたね。

奉公先からお嫁に出してもらった

江戸さんで1年奉公して、本当はもう1年働くはずだったんだけど、ここのうちに働く人いないから行かないかって。嫁さん欲しいっていろいろ探していたみたいで、それで来ることになって。内地にこういう話あるって言ったら、姉が連れに来たんですよね。そしたら江戸さんの父さんにいい話ばっかり教えられて説得されちゃって。

結婚式はね、わたしより一つ上の江戸さんの娘さんの紋付借りて着て、ここの家でやったの。小さい結婚式だからぞろぞろっていうんでもないけど、馬そりに乗って江戸さんの息子さんが馬を使って引っ張ってきてくれたような気がするね。私のほうからは姉がひとり来たくらいで。そんな豪華なもんでもなかったけど、江戸さんでちゃんとしてくれたね。

働けば働いただけ

貧乏だったからね、働いた働いた。当時はね、エンドウとかサヤエンドウなんかの豆、カブ、そして露地でイチゴね。野菜はキュウリ、トマト、ナスビ、ピーマンとかっていろいろ作っていたから、忙しいのは7月の半ばから9月いっぱいくらいかね。そういうの作ったりしてお金あげたね。その頃はね、うちら畑新しいもんだから、トマトでもキュウリでも大きないいものがとれてね。ホウレンソウ作っても、いいものができましたよ。いつもじゃないけど、ホウレンソウ1箱1万円とかって、そういう時あったんですよ。トマトもすごい高いときあったしね。

こんなこと言ったら自慢って言われるかもしれないけど、そういうときなんて、1日に100万円くらい何日間か続いた時もあるよ。とにかくうちは貧乏していたから、働けば働いただけ、作り物よくなってくれるし利益はあるし、本当、ばかみたいに働いた。

農家は休みがない

おばあちゃんは子どもができたから子どもの守りしたり、うちにいてごはん支度したり。おじいちゃんは田んぼも少しあったから、田んぼの水見たり、そういったことしてね。田んぼって言ったって、お米は食べる分だけ。

働き手は、そこにある昭和採石場に青森から働きに来ていたおばあさんに何時間か来てもったり、農協のほうで働きたいっていう人を10日なり20日なり忙しい時に働いてもらったっていうのもあるね。

働いている人たちは1週間に1回とかって休みが決まっているけどね、私ら農家の人は、休みはない。雨降ったってハウスの中があるから。三つ葉の草とったり、いろいろな仕事がハウスの中で待ってるのね。当時はね、うちら貧乏だったから、障子戸に油紙張って、そこで苗もの作ったりね。ビニールのハウス使うようになったのは、いつ頃だろうね。昭和40年くらいかな。うちはあんまり早くはなかったね。当時は巾着みたいな大きなイチゴがとれましたよ。それもいい金になったんだね。

寝ないで働いた

畑が家から離れていたから、向こうに貨車（貨物列車の車掌車でした）を買っておいて、そこでご飯も炊けるようにしてね。そしてピーマンでもキュウリでもなんでも、選別しなきゃいけないでしょ。昼はもぐのに忙しいから夜寝ないで選別するんだわ。それが大変。お父さんは運転するから寝なきゃならないから、私が一人で選別です。あのころうちの息子がラジオつけて置いていってくれたのがうれしかったの。ただ流していれば眠たくないだろうって。それが一番の思い出。

朝だって早く市場行かなきゃいい場所取れないから、とにかく早く選別したね。間に合わなければお父さんも早く起こしてきて選別して。市場で売り終わるのは大体6時くらい。そしてうちに戻ってきておばあちゃんの作った朝ごはん食べて、またすぐ、昼寝するわけでもなく畑に行って。だからお父さんがもうね、トラクター運転して畑おこしたり消毒したりしていたら、眠りながらやってね。

お金数えるのが楽しみで

市場にはお父さんが車運転して二人で行きましたね。今は市場に置いてくるだけだけど、その時は立ち売りってあったんですよね。そこで立っていて八百屋さんに売らなきゃいけないから、いい場所をとらなきゃね。そのために2時半か3時くらいには着いたね。お客さんも早い人はそのくらいにね。三つ葉を前注文で買って籠で背負って小樽にもっていくおばあさんたちもいたね。それがね、持って行って売るでしょ、そしたらお金を足に挟めて今度数えて、それが楽しみで。

六条市場にはあまりいなかった。市場（今の中央卸売市場）のほうに別な立ち売りを生産組合かなんかで作ってね。場所は早い者勝ちで、場所代を払った。昔はみんな馬車で行ってたんでしょ、うちのばあちゃんも馬車でコトンコトンと行ったもんだ。そのあとに、昭和35年か37年くらいかね、三輪車って、古いの買ったらもう、故障ばっかり起こして大変で。エンジンかからなくて押したり、夢中で押していたら自分の足を車が通ったって痛いなんて言ってられないからね。

市場の帰りには競馬場の堆肥を積んで帰ったりもしたの。それがね、ぼっこぼっこって湯気が出てもう暑くて暑くて、そして馬が運動しているから静かにやらないといけないし。妹の夫が競馬場に牧草売るような仕事していたもんだから。堆肥はタダだから、助けられたよ。馬の堆肥だと、畑はふわふわと、畳の上歩いているみたいになってね。

菜っ葉のほうが楽

今は、小松菜専門だね。トマトとかキュウリとかナスビとか、そんなのは、うちの嫁さんたちが作って、そこの宮の森のホーマックで売ってるんだ。葉物は、最初は小松菜とか大根とかからし菜と

か。やっぱりだんだん年とってきたから、菜っ葉のほうが軽くて体は楽だし、一年に何回も採れるし。町のほうでも菜っ葉作っていただろうけど、開けてきて作られなくなったでしょ、それで案外いい値段で売れる感じになったわけ。

冬はね、今年は12月10日くらいまで畑まだやっていたのね。そしてここ二、三日は、菜っ葉を親戚のところに持って行ってやったりなんかして、うちにいないでちょこちょこ用足したりして歩いているけど。2月になったらね、またハウスかけるのに忙しくて、2月の20日ころからやってますね。

農業って楽しい

私たちは農業って楽しいもんだと思っていて、いやだってあんまり思わないね。仕事がなくて困っている人がいるのに自分のうちの畑で仕事するんだからね、こんないい仕事ないと思って。もう、家の中かまっているより畑にいたほうが楽しいのね。

台風の時に脚立で倒されて腰の骨折ってね。それでもね、手術して1年はうちにいたけれども、その次の年からもう、不自由な体だけれども、それでも毎日畑に行った。やっぱり違和感はあるけど、仕事していたら忘れてしまうの。そうしているほうが楽しいんだもん。仕事しているのが楽しい。お父さんだって起きたらもうすぐ畑行くの。暗くたってなんだって畑行けば明るくなるって。今この歳になってでもそうなの。

何が楽しいって、健康で、人の役に立っているっていうような感じ。よくそんな体して働くわ、て言われるけど、でも、働くほうが楽しい。小松菜でもなんでも、いいものができていたらうれしい

し、採るのも速いし、そういうのが楽しいのね。昼前になんぼ箱とったとかね。遊んでるっていうことはあんまり好きじゃないね。一生懸命やって、自分の体がしびれるくらい働いて、自分の体に挑戦っていう感じ。

これからの若い人に私はうまいこと言えないけれど、若いうちは一生懸命働くの、体が若いからなんぼでも働けるの。一生懸命なんでもやったほうがいいよ。まあ体壊したらだめだけどね。そのかわりちゃんと体にいいものを食べて、辛抱して努力して、働けばそれだけのものが自分に与えられるの。

（構成／西嶋真央）

馬に食べさせるものを作るだけでも大変だった

佐藤勝馬さん（昭和12［1937］年生まれ）

円山まで歩くのはなんとも思わなかった

想像できないかもしれないけどさ、円山まで歩いたんだからね。片道1時間半くらいかかったんじゃないかな。昔は野菜なんかをつくったら円山市場へ持っていく。2時か3時に家を出ていく。六条市場のときもだいたい同じ。こっちにはだいたい7時か8時に戻ってくる。車がなかったので、馬にのっけて運んだ。馬は長く歩けばお腹もすくし、のども乾くし、水も飲ませなければならない。デントコーン、牧草、エンバクを少し積んで食べさせる。

1年間のうち、朝市に通うのが4ヶ月ぐらい。果物は出荷できるのが3ヶ月間ぐらいしかないよね。市場で野菜を売るための場所を借りる料金は毎年3万から5万。これは民間で、地主さんがやっていたんだ。八百屋さんと一対一で話し合って売る。大体買う八百屋さんって決まっていたんですね。円山市場の場合は現金で取引してうち帰ってきてお金の計算をするね。そして、3万円とか5万円とか毎日家へ持ってきて、うちの中に置いといて、一週間に一回農協さんがお金を集金にくる。

最初は円山市場、結婚したころ（26歳）は六条市場に通ってた。中央市場に行ったのは平成に入るちょっと前だったかな。中央市場の方に売るようになって、一番変わったのは、ただ野菜を置いてく

るだけになったこと。車に積んで、市場に行って指定の場所におろしてくる。家を出て中央市場に行くのは5時か6時。楽だった。手数料とられてもね。自分で売るっていうのはやっぱり大変だね。

円山市場には店がたくさんあった。市場の他にもお店がありました。飲食店も円山市場のあたりからちょっと札幌寄りのあたりにけっこうあった。昔は昔なりに楽しみはあった。当時ね、1時間から1時間半歩くことはなんとも思わなかった。円山まで歩くのもなんとも思わなかった。

馬に食べさせるものを作るだけでも大変だった

馬にはデントコーンだとかエンバクを食べさせた。馬に食べさせるものを作るだけでも大変だった。うちの畑の3分の1は馬の餌で、収入は少なかった。小屋の藁（わら）の切り替えとかも1日や2日おきにやった。そのころの馬は輓馬（ばんば）系統だね。当時馬は貴重な存在だった。私の家は1頭飼ってたけど、2頭、3頭飼っていた家もありましたね。

車を初めて買ったのは20歳くらい、昭和32年のこと。最初はダイハツのツノハンドルの車。それからマツダの三輪車だけどマルハンドルの車。それから普通車になってきたね。三輪車は故障はもちろん昔の車だからあったけども、自分で車の修理をしていた。完全な整備はできないけどもね。

綿羊は養いやすかった

綿羊もおりましたよ。昭和25、26年ころ、農協が一頭ずつ無料で農家にくれた。子供が生まれたら子を農協へ代わりに返す。綿羊はどっちかっていうと雑食。草を勝手に食べる。綿羊は養いやすかっ

た。

農協に羊の子供を返した後また子供が生まれたら自分のうちで繁殖させた。町内会で種の綿羊を1頭農協から買ってそこの綿羊でみんな種をつくっていた。私のとこでもよく種綿羊をおいていたけどね。小別沢会館で綿羊をつぶす講習会が開かれていた。綿羊の肉は肉屋さんに売ったり、毛糸は農協にもっていっていた。綿羊専門の加工場があったのです。そこで布団を作ってもらった。綿羊は10～15年間くらい飼っていたね。

宮の森温泉に卵をしょって行って売っていた

豚はごちそうだった。豚は6月頃から飼い始めて12月に人に頼んでつぶして食べる。おいしかったよ。保存は雪の中に入れておくとかね。綿羊が入ってきたら豚を飼わなくなった。昔は豚は貴重だったし、残飯で育ったからね。

鶏も飼っていたころがある。20代のときだった。卵は自分でも食べたけど、売っていた。１００羽～２００羽くらい飼っていた。小屋の中で放し飼い。卵は当時は値段がよかった。宮の森温泉があったんだよな。宮の森温泉に卵をしょって行って売っていた。卵は貴重品だった。鶏は長くは飼っていなかった。１００羽いても30羽くらいしか卵を産まなかったり、病気になったり、イタチにやられることも1、2回あった。

作る野菜も変わっていった

家ではエンバク、大豆、馬鈴薯を作っていた。馬鈴薯のタネイモも作っていた。若い頃はトマトやキュウリ、ナス、ピーマンとか果菜類が多かった。ハウスを使うようになってからは葉物が多かったね。ほうれん草、三つ葉、春菊、そして、小松菜。それはやっぱり年のせいもあるし、果菜類は日持ちしない。それに葉物は軽い。

小さいハウスは昭和50年ごろからやったけども、ハウスは最初の頃は普及しなかった。何十メートルの大きいやつは平成にはいってから。その頃から市の助成金が出るようになった。ハウスをたてるのにかかったお金の50％は市が出してくれた。傾斜を削らないとハウス立てられんから。

昔は小麦や裸麦も作ったね。裸麦は余ったものを売った。裸麦はひげ（毛）をとるのに火をつけて燃やすんだよね。麦焼きをやっていた。ひげをとっておくと籾（もみ）だけ残る。小麦の脱穀は農協に出した。裸麦はだいたい自家用。お米と混ぜて炊いた。うちは田んぼがなかったから麦の方が多かったけどね。米は買っていた。米は貴重品だったよ。

亜麻も作ってた。収穫したものを麻生（あさぶ）まで馬に積んで売った。麻生に工場があった。全部繊維になる。それと除虫菊。虫よけに使ったんだよね。大麻も作っていた。大麻も繊維用。大麻を刈って水につけて腐らす。悪いとは思わなかった、そういう時代だからね。

農業も共同で

作物ごとの組合があって、共同作業をしていた。野菜は円山市場に個人でもっていって、大豆などは琴似農協へもっていった。タネイモ組合を熱心にやっていたのは17～18歳のころ。中学を出て、3

～4年間かな。タネイモ作る場合は中くらいの大きさの馬鈴薯を4つに切るんですよね。馬鈴薯は病気がある。それを防ぐために4つに切って植えて、播種（はしゅ）する。病気になったタネイモは部落の人が共同で抜く。タネイモ組合の信用にもかかわるから。自分ではなかなか抜きにくい、いたわしくて。タネイモの出荷先は農協。馬鈴薯も出荷する時は共同でやった。各家を回って馬鈴薯を集めて袋に入れたりだとか。

秋になったらね、簾（すだれ）を編むんだよな。ヨシを石狩川で刈ってくる。織りみたいに紐に糸を巻いて畑に風があたらないように。昔は全部自分で作ってやった。主に畑の風よけ。みんな作ったんだよね。結構手間がかかるよ。一つの高さ六尺ぐらい（1・80メートル）。春と秋の農作業のあまり忙しくない時期にみんなやってました。

家内は青森からの季節労働者

家内の出身は青森の東北町（青森県上北郡東北町）。若い時にこっちに働きに来ていた。18歳の時の春に橋場さんのところに働きに来て、すぐその年の冬に嫁さんに来てる。その時、私は26歳ぐらいだった。

当時の食事の話

食卓にはかぼちゃ、馬鈴薯、そういうのが多かったよね。かぼちゃは外のかまどで晩に煮る。晩食べて朝にまた温めて食べた。ジャガイモも煮た。そばは家で石うすで作った。けっこうおいしかっ

た。とうきびご飯なんかもあった。ひどい時はぬかご飯。いなきびなんかもあった。いなきびも家で作ってた。

冬は出稼ぎ

この辺の人はだいたい冬は山に出稼ぎだったからね。平和（西区平和）の奥だとか、福井（西区福井）の方とか定山渓まで行って働いた。歩いたら2時間もかかってね。私も出稼ぎに行った。造材の道直しの仕事に行った。馬を持って行ったこともある。ナラ、イタヤ、センノキとかを伐って薪用にも使った。自分で伐って運んできて薪用に切り分けて、余ったものは一山なんぼとかで売っていた。

うちはあんまりいい畑でないもんだから、うちの親父は夏も行った。正月とお盆くらいしか帰ってこなかった。支笏湖だとか、終戦前は樺太にまで稼ぎに行っていた。

1日の給料は大体500円くらいだった。そのときはたとえば直径何センチ以上のものは伐らないと決められていた。山ではまずは区画が決められて、その中でもこの木を伐ってはいけませんよって。農家は斧と手引き、鋸を使う。

今の状態のままでいるのが一番いいのかな

昔栗林だった場所が資材置き場になったのは、平成になってその土地の持ち主さんが変わってから。農地をどういうふうな形で残していくのが一番いいのかを考えるのが、これからの問題だよね。

私の子供の中に農業をやりたい人はいなかったね。手伝わせなかったのが悪かったかも。小別沢の

畑は家から離れているからね、無理にとは言わない。畑は管理しておかないと、あっという間にくるみだとか柳の木が生えてくる。今、定年退職した二十四軒に住んでいる人と二人で畑をやっている。小別沢で後継者がいるのは2軒だけ。本来は三世代四世代農業を継いでいくのが一番いいんだけど。ただやっぱり小別沢は条件悪いさ、傾斜地で。山の中だし。畑は畑のままで、山林は山林のまま、今の状態のままでいるのが一番いいのかな。農業をつづけるために、とりあえず収入源としては今、市民農園が一番いいのかな。

（構成／佐藤凜太郎）

小別沢の歴史

製炭から始まった小別沢の歴史

小別沢地区はもともと盤之沢（ばんのさわ）と呼ばれる地域の一部だった。盤之沢は、陸軍省の公有地で、屯田兵の準備用地となっていた。明治27（1894）年に日清戦争がはじまり、屯田兵が戦争へ行くための費用が必要になったので、盤之沢で製炭が行われることになった。明治28（1895）年、屯田兵である長峰忠四郎を中心として製炭が始まった。そこに我満嘉吉（がまんかきち）さんなどの炭焼人夫頭も移り住むようになった。こうして盤之沢の開拓が始まった。

造材、製炭を目的とした移住者が増加した。屯田兵のための製炭は明治32（1899）年まで続き、その後製炭の権利は焼子にゆずられ、一定の税金を納めれば製炭ができる仕組みになった。このことは製炭のための移住者を増加させた。

造材事業は、明治30（1897）年、国の森林の一部が払い下げになり、その木を運び出すことから始まった。当時、木は川を流して運んでいた。盤之沢は木材が豊富で質も良

かったため、札幌や小樽の商人によって外国へ輸出されていた。また、盤之沢の木材は、現在の北海道教育大学の前身となる北海道師範学校の校舎建築などのためにも使われた。造材は明治33（１９００）年まで行われ、製炭は明治40（１９０７）年まで続いた。

山火事と農業のはじまり

盤之沢での農業は、明治30（１８９７）年に発生した山火事の跡地で始まる。明治30（１８９７）年5月に山火事によって山林10ヘクタールほどが焼けたとき、我満嘉吉は焼け跡に粟（あわ）をまいてみた。すると予想もしなかったほどの多くの収穫を手に入れることができた。このことがきっかけとなって盤之沢で畑作が行われるようになる。小別沢はその後もたびたび山火事にさらされたが、かえって農業のために良い土壌が形成されていった。初めは粟や小麦といった主食作物の収穫が中心であったが、その後明治41（１９０８）年に水稲を行う者も出てくる。

明治43（１９１０）年に大規模な山火事が発生し、小別沢まで火が拡大した。小別沢の住宅12軒も山火事に巻き込まれ、地面に穴を掘り濡れたむしろをかぶって助かった人もいた。しかし、その焼け地が良い土壌となって小別沢地区での本格的な農業が始まる。この山火事で山の木が焼けてしまったため製炭や造材ができなくなり、それまで製炭や造材に従事していた人々が畑仕事を始めるようになった。この時は粟、麦、イモなどが植えられ、田畑の拡大が進んだ。

道路整備と学校

このようにして小別沢の開拓が進んでいき、道路も整備されていった。開拓当初、我満らは川沿いの道をつくって移動していたが、少しずつ木を切り倒し、明治32（1899）年には馬車で西野（現在の西区西野）まで通えるようになった。明治から大正にかけて札幌の街も拡大し、札幌への道が必要になると、明治38（1905）年に十二軒（現在の中央区宮の森）へつながる道ができた。この道は、我満の案内で屯田兵たちが山を越えたのが始まりであり、兵隊たちに踏み分けられた道が少しずつ広げられていった。

農業の拡大と道路の発達によって人口の増加も進み、教育施設の設置を求めるようになっていった。学校を作りたいという声が強まり、明治45（1912）年、琴似尋常高等小学校附属盤之沢特別教授所が設立された。この学校は自分たちの資金によって建てなければならなかったので、地域の人々の寄付によって建設された。大正5（1916）年には盤渓青年団が設立される。

大正に入ってさらに農業が拡大していき、小別沢の人口は増加していく。それに合わせて交通や教育機関の整備も進む。大正3（1914）年、盤渓東北部が札幌神社（現北海道神宮）の神社地となった。札幌神社はこの土地の開拓を田中武雄にまかせ、小作料も3年間は無料としたので、多くの人たちが移り住んできた。農地も拡大した。また、神社地の見回りのために道路もつくられるようになる。このころ、小別沢の人々は山仕事を中心

とした生活から、春から秋にかけては畑仕事をし、冬には地域外へ山仕事をしに行くという生活へと変わっていった。

野菜生産へ

札幌の街の拡大も小別沢の農業に大きな影響を与えた。札幌の街が拡大、発展していき各地に店や市場ができるようになっていった。大正7（1918）年、円山朝市が北1条西25丁目に開設され、小別沢の人々も積極的に参加することになる。円山朝市が開設されたことで、小別沢で耕作される作物は野菜や果物中心へと変化していった。小別沢の人々は主にキャベツやカボチャ、キュウリ、ナス、果物などを売りに出していた。朝市への売り出しのために小別沢の農家は朝早く出かけて午前中に小別沢へ戻るという生活を送るようになった。

小別沢の人口はさらに増加し、大正10（1921）年には盤之沢と小別沢に地区が分かれることになった。また、大正11（1922）年には、小学校を設置したいという要望が認められ、公立の盤渓尋常小学校が設立された。

昭和に入ると暮らしに大きな変化が起こる。昭和5年には小別沢住民の手でトンネルが造られた。トンネルができるまでは、小別沢から市場まで山を越えて行かなければならなかったが、トンネルができてからは馬やその後は三輪車で行けるようになった。

しかし、昭和16（1941）年に太平洋戦争が始まると、暮らしが厳しくなっていく。

配給制になり、米なども決められた量しか買うことができなくなった。戦時中はどの小別沢の家も防空壕を持っていた。また、住宅を空襲から守るために木の枝をかけて屋根をかくしていた。戦争が始まった時、学校の名前も盤渓国民学校へと変更された。

戦後

戦争が終わると学校の名前は盤渓小学校に変わり、琴似中学校盤渓分校が作られた。戦争が終わるまで小別沢では電気のない暮らしが続いていたが、我満嘉明が川の流れを使って水車による発電を始めた。水車でつくられた電気は小別沢全体までいきわたっていた。しかし、その発電量は少なく電気の供給も不安定であった。運動会などの地域の行事で電力が必要なときは、バッテリーを円山まで台車で運んで充電し使っていた。

昭和21（１９４６）年に電灯が付き、24年には小別沢にバスが開通する。人口が増加していた小別沢だが、昭和22（１９４７）年以降小学生の人口が減少していく。これは農家をやめて札幌に移り住む人が増加したためである。そして、盤渓小学校の通学区であった小別沢地区は、昭和44（１９６９）年に手稲東小学校の通学区に変更された。昭和45（１９７０）年には盤渓中学校が向陵（こうりょう）中学校と統合された。昭和45（１９７０）年に小別沢は、西区に組み込まれた。小別沢の道路の整備は昭和47（１９７２）年の札幌オリンピック開催に伴ってさらに進んでいった。

戦後、農業も変化していく。大正期から冷害による凶作の年はたびたび発生していた

が、昭和29（１９５４）年に大凶作が発生した。また、昭和30年代から機械を用いた農業がおこなわれるようになる。それまでは農家は馬を使って畑を耕していた。また、昭和30年代頃から小別沢では小松菜を作る農家が増えてくる。

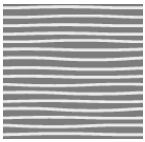
現在小別沢ではハウス栽培をしている農家が多いが、ハウス栽培は昭和50年代から増加した。大きなハウスでの栽培が本格的に普及していったのは平成に入ってからである。ハウスでは三つ葉や春菊、ホウレンソウなどが作られている。ハウスと畑での農業を行っている農家が多かったが、負担が大きいため、現在はハウスだけにしようという農家もいる。

（佐竹創）

参考文献

西野神社ホームページ（http://nishinojinja.or.jp/kyoudo/）
盤渓小学校開校八十周年記念事業協賛会『盤渓小学校 郷土誌ばんけい』札幌市立盤渓小学校、１９９２年
札幌市史編集委員会編『琴似町史』札幌市、１９５６年
西野ものがたり編集委員会『マンガ西野の歴史』２００８年

円山朝市とは



円山朝市の歴史

円山朝市は明治中期、明治23（１８９３）年頃に始まった。明治20年代に入り、札幌の人口増加に伴って野菜などの需要が増えたため、円山近辺で栽培された野菜などをまとめ買いして札幌で小売する八百屋が増えた。そこで、南1条西10丁目付近で生産者と八百屋が取引をするようになった。これが円山朝市の始まりである。札幌市街地の発展のため取引場所は漸次西に移動しながら、大正６（１９１７）年までそのような形態で朝市が続いた。

大正７（１９１８）年には、円山蔬菜組合の設立とともに、自然発生的に続いてきた円山朝市が組織化され、場所も西25丁目通へ移転された。その規模は南1条中通から北1条中通の全長２００間、奥行き12間になった。その後円山朝市は、大正11（１９２２）年には西24丁目通へ再び移動した。昭和７（１９３２）年には、円山蔬菜組合が藻岩（もいわ）蔬菜生産

組合と改められた。

農業生産者は朝市にじかに野菜を持ち込み、対面で八百屋と話し合い交渉して価格を決め、野菜を売るという対面販売を行った。しかし、昭和16（1941）年に太平洋戦争が勃発する。戦時体制に伴う統制経済の影響で、ついに昭和17（1942）年、藻岩疏菜生産組合は組合組織を解散し、円山朝市は実質的に閉鎖されてしまった。

円山北町朝市

太平洋戦争を挟んで、円山朝市の場所が変化した。実質的な閉鎖から7年にわたる月日を経て、昭和24（1949）年、琴似手稲方面の生産者を中心に北7条西25丁目に新しい市場が生まれた。同じ年、円山の生産者を中心に北6条西24丁目にも別の新たな市場が生まれ、両者が隣接して併存する状態になる。これらは「円山北町朝市」と呼ばれた。その後、琴似手稲方面の生産者中心の市場は現在の中央市場場外へ移転して解散する。

円山朝市と小別沢の人たち

円山朝市は小別沢の人たちにとってなくてはならない存在だった。小別沢で栽培した野菜をじかに朝市にもっていき、八百屋に対面販売をして収入を得ていたのである。八百屋が朝市で買い取ってから札幌で売るため、八百屋は朝早くに朝市での買取を終わらなければならない。したがって円山朝市の始まりは早く、3時ころには始まっていた。朝市があ

る日は、小別沢の人々は前日の暗くなるまでに収穫を終えて夜遅くまで選別・箱詰めをして、少しでもいい場所を取るために2時くらいには起きて出発するという生活を送っていた。

小別沢から野菜の運送には、戦後しばらくまでは馬が用いられていた。昭和5（1930）年に旧トンネルが開通した後はトンネルを通って市場に向かったが、開通する前は馬で頂上まで上がって山を越えて市場に行っていた。その後、戦後しばらくしてから、三輪自動車での運送が始まった。

（日野陽平）

参考文献

円山百年史編纂委員会編『円山百年史』円山百年史編纂協賛会、1977年

札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫40 札幌収穫物語』（第6章「円山朝市と山口スイカの道」267～276頁）札幌市・札幌市教育委員会、1987年

竹江茂春「円山朝市の食べ物屋」札幌市教育委員会文化資料室編『札幌文庫43 大正の話』札幌市・札幌市教育委員会、1987年、210～217頁

参考URL

円山の歴史と文化 △http://sapporo-jouhoukan.jp/maruyama/rekishi.html▽（2016年1月20日閲覧）

さっぽろ わくわく商店街 由来・日因縁・ミニヒストリー 第26回 円山商店街振興会 △http://www.011.or.jp/02_bn/history26.html▽（2016年1月20日閲覧）

伊部義幸さん（昭和14［1939］年生まれ）

中学の時から農業の仕事をしてきました

中学校にはあまり行けなかった

私はずっと小別沢。兄弟は8人。私は4番目。上が女3人で、下は男2人、女2人。

我々の年代は三代目。うちは元々福井県から小別沢に移住してきたの。長男であるうちの親父が3歳の時（1910年）に、福井から小別沢へ移住してきた。

親父は昭和27年に45歳で事故で亡くなったんだ。私は小学校6年生だった。盤渓小学校の落成式と運動会を兼ねた行事の朝、床屋に行った帰りに、手稲と琴似の境の橋から落ちて亡くなった。酔っぱらって落ちたわけではなくね。運動会も中止になってね。親父が町会議員していたもんだからさ。

中学校は琴似中学校の盤渓分校だったんだけど、親父が早くに亡くなったもんだから、夏場は農作業で中学校にはあまり行けないでね。中学3年間のうち半分くらいしか行かなかった。兄弟たくさんいたし、家のほうの仕事が大変で。父が亡くなってからは私が中心となって農家の仕事をしていた。

葉物野菜に切り替わった

当時はね、今と作物の形態が全然違う。馬鈴薯だとかかぼちゃだとかの重量野菜を作っていたんだねえ。それから大豆、小豆。それからあとになって、私が20歳のころくらいに、キャベツとかの野菜に切り替わった。それから20年経ったころ、今度は葉物野菜に切り替わった。やっぱり収入の関係があって時代の波に沿って作るものを変えていかなきゃならない。葉物に切り替わってきたのはだんだんみんな年を取ってきて体が動かなくなってきたから、重労働が必要な重量野菜はつくれなくなってきたんだ。

冬は山仕事に行った

若いころは1月から3月の頭くらいまでの2か月くらい、冬の山仕事に行ったんだ。定山渓（じょうざんけい）の小金湯（こがねゆ）の裏山の方で造材の仕事にね。夏は農業やって、冬は山に働きに出ていた。定山渓の山の飯場（はんば）に泊まりこんで住み込みでやっていた。国からの払い下げを受けて材木業者が木を出すのに人手がいるっていうから。

山仕事は22、23歳くらいまではやったかな。小別沢にいる私の代の住人で、冬の山仕事をやった人は何人かしかいない。山に出稼ぎに行かない人は札幌の方でアルバイトをしていたね。家にいて遊んでられない時代だったから。定山渓の飯場から帰ってきたらまた農家の準備が始まる。

卒業証書いらねえ

親世代は、トンネルがなかったから、頂上まで上がって山越えして市場に出しに行ったんだよ。旧小別沢トンネルは昭和5年に掘り始めた。「昭和5年」というのは知らなかったんだが、北海道神宮の神主さんで神宮の書類を調べた人がいて、そしたらそこにうちの爺さんが代表で当時の札幌神社に出してる陳情書の原本があって、それで昭和5年ってわかった。当時の話を聞いたら、地元の連中の手彫りで、山崎火薬っていう火薬屋に協力してもらったって。大した道具もないのに、トンネルのズリ（捨石）を馬で出したっていうんだから。昔の道路はトンネルのズリがずっと引いてあったみたいよ。

トンネルができていたから、私らの頃は市場には馬で行ったんだ。そのあとはオート三輪に乗って行ったよ。狭くて大変だったのよ。昔のトンネルは隧道だもん。昔なんて除雪もなんも入らないしょ。だからここの部落で当番制でそこの端から宮の森シャンツェのあの出口まで交代で馬で道空けしたんだ。

小さいころから市場にはついて行っていた。市場から家に帰って、それから盤渓小学校まで行くのに、学校に遅れてさ。遅れたってしょうがないんだ。夜中の12時か1時ごろに馬で出かけて、1時間半かそこらはかかって、着くのは2時くらい。それで市場から家に帰ってくるのは8時過ぎるんだもん。学校には9時までに行くのに、どうしても遅れるの。小別沢から小走りしても学校まで30分以上かかるからね。校長に「伊部、学校卒業できないぞ。こんなに遅刻したら」と言われて、そしたら私は「卒業証書いらねえ」って言って（笑）。

盤渓と言ったらスキーの有名な学校だった

我々はスキーが好きだったもんだから、クロスカントリーに出て、そして宮様大会で6位入賞してさ。当時は盤渓と言ったらスキーの有名な学校だった。だから昔、道新杯って大会があったんだけど、出たらみんな盤渓の人が優勝したり入賞したり。だって、通学がスキーなんだもん。だから子供たちも強いのさ。小さい子の面倒を見てみんなで学校に連れていくのが大変だった。スキー習わすのに。

親のやってきたことを守っていかねば

我々は盤渓小学校だったけど、学級が我々のクラスが一番多くて13人で、あとは3人とか5人とかのクラスだった。クラスは複式で、教室を1、2年とか3、4年に分けて授業受けてたんだ。だから違う学年の人とも交流があった。我々の年代は今でも交流がある。1年に1回くらい同窓会のようなものをやっていてね。去年も盤渓記念事業をやったんだ。あっちこっちに散らばっているから、横浜から来る人もいる。

横浜とかに行っている連中はみんな高校出ている次男三男。この地域は経済的に楽ではなかったからね。親大変になったら定時制に行ったりさ。長男が上の学校に行くなんてことは大体考えていなかった。我々の時代は親のやってきたこと、財産を継承して守っていかなければということが頭にあったからね。だから、嫌だからと言って放って出ていくということにはならなかったね、当時は。

盤渓の運動会は盛り上がっていた

我々の時代は恋愛とか何とかいう時代ではないからね。結婚したのは26歳のとき。叔父の紹介で。結婚といえば、青年団なんかの交流でお嫁さんに行ったりすることが多かったな。各地区の青年団間で意見交換みたいなのをやったり、そういうふれあいがあるからね。青年団は、学校に協力したり、運動会や祭りを手伝ったりしていたよ。やっぱり田舎の学校だから、農家の人が手伝わなかったらできないこともあったんだよ。

盤渓の運動会は特別で、子供プラス父兄が盛り上げる運動会だったね。小別沢、盤渓上、盤渓下って地区対抗だったのさ。子供に限らず大人にも対抗リレーがあってさ。そんなのが長年続いたなあ。

あとね、馬頭観音のお祭りを5月17日に、ずっと、何十年もやっていた。琴似神社から神主呼んで。その祭り行事に子供相撲をやって子供を寄せて。子供がだんだん少なくなってからは大人も相撲に参加して、大人がケガしたりしていたこともあって、骨折した人がいた記憶もある。30年くらい前までやっていた。時代が下って馬がいなくなってオート三輪になって、安全を祈るのは車に切り替えたらどうだという話まで出てね。でも、廃止するのに、これは罰が当たるからということで、今ある場所に馬頭観音の記念碑を復元させたんだ。

うちの小松菜は学校給食に出している

私が生計を立てている農地はハウスのほうだね。実面積は5反くらい。ハウスでは今、春先は苗ものを作ってＪＡに納めて、そのあとは札幌市内の小中学校の給食に納める小松菜栽培をしている。小

松菜は1年に3回作っている。うちは11月の中くらいまで出してるね。2月の末になったらハウスの準備にかかるから、本当の休みと言ったら12、1、2月の3か月しかない。冬の間もいろんな役職で忙しいのさ。今、西区の消防団長やってるもんだから、大変なんだ。

今作ってる野菜は、農協から出荷番号をもらって中央市場に出している。学校給食用の小松菜は、農協を経由して、そして学校に配送する業者がちゃんといる。給食に出すのは価格が安定してるからいいのさ。市場に出すと価格がバラバラ。日によって上下するの。だから、札幌市にたくさんとってくれよって要望してるんだけど、給食に使う使わないは栄養士次第なんだよね。

あと、貸農園始めて16年経つの。もともとやり手がいなくて、伊部さんがやってたんだけど、うちへも札幌市からお願いされてさ。そしたら今度応募者が多くて多くてね。200区画あって、すべて埋まってる。1区画60平米。農協を窓口にして受け入れをしていて、常に空き待ち状態。

息子は百姓やっていない

今この状態で農業をやっていくというのが厳しくなったのは事実。収支が合えばいいんだろうけれども。子供たちの考えが、百姓よりサラリーマンの方がいいという風に時代に沿って変わってきた。息子がいるんだけど、百姓が儲かるんだったら我々も「お前やれ」といえるんだけれども、そんなこと言えないもんだから。息子は百姓やっていない。息子は札幌にいて二人とも働いているもんだから、やれる間は自分がやろうという考えでいるけれども。まあ、どうしてもだめだということになれば、農業法人でも誰でもやれるという時代になったからね。

だからってここが開発されて宅地化になるというのも…。一時そういう話もあったんだよ。バブルの最盛期に。青写真まで和田さんと企画して作ってね。話を進めていく中で今度、ここは傾斜地が多いから果たしてそれでやって収支が合うかということになって。そして、そのあとバブルがはじけて景気が悪くなったでしょ。これはやっても駄目だということになってね。地区の何人かの反対もあって頓挫した。後継者いる人は「いやいや、宅地化はだめだ」という話になって。

ここの家建てる前、うちもね、一回ここから出て琴似に行ったことあったんだ。50年くらい前に。琴似からこっちに通って農業やろうと思って。2年もいなかったかな。そんな時期もあった。でも百姓やるなら通い作りじゃだめだっていうことでね、そしてここに戻ってきて、でまたここに家建てたのさ。こんな静かないいとこない。収入がきちっと固定されて生活するんならこんないいとこないしょ。静かでね。

（構成／七崎　航）

伊部恵美子さん（昭和15［1940］年生まれ）

あのころは若かったから仕事を二つ三つ同時進行で出来たんですね

生まれた時からずっと農家をやっています

手稲山口出身です。手稲山口（札幌市手稲区）では実家がスイカ農家で、手伝いをしていました。昔は山口スイカっていって、スイカの産地でしたね。今は富良野だとかスイカの産地が出てきましたけどもね、あの頃は山口スイカってちょっとしたブランドのスイカでしたね。あとは水田とか、メロンだとか、瓜類だとか。本業ではないですけども牛も少しやっていました。

小別沢に来たのは昭和39年、23歳の時です。東京オリンピックの年の春に来たんですね。だから小別沢に来て52年目くらいになるんですよね。旦那の農家は野菜専門で、水田は自家用に作っていましたね。小別沢に来てからも農家の手伝いですから、生まれた時からずっと農家をやっています。

子どものころは掃除したりお風呂たいたり

昔ですからね、子供も農家を手伝っていましたね。私は末っ子だったので、上の兄や姉は学校から帰ってきて畑を手伝っていたんですけど、私は主に家事の方、掃除したりお風呂たいたり、夜のご飯の支度をやっていました。友達と放課後遊んでいても与えられた仕事をしなくっちゃって、時間になったら急いで家に帰っていました。たまに遊びすぎておうちに帰ったらね、まだ自分の仕事が終わらないうちに畑から親とか兄弟が帰ってきたこともありました。でも子供だったから、遊びすぎて帰って来ても怒られませんでしたね。

同時進行で仕事をした

朝4時に起きて、薪を使ってご飯をかけて、掃除したりおかずや味噌汁を作ったりして、大体1時間かからないうちにご飯ができました。あのころは若かったから仕事を二つ三つ同時進行で出来たんですね。今みたいにスイッチ入れとけば米が炊けるんじゃないから、常に火加減を見て、煮立ってきてから火を弱くしたりとか、火を止めたりとか、同時進行で掃除をやっていたりしていました。

夜はその日の仕事の内容によってある程度終わるまでやりました。きゅうりはもぎ遅れると、大きくなりすぎて価格がぐんと下がってしまいますからね。トマトなんかも赤くなりすぎると全然値段が下がるから、今日とれないと明日っていうわけにはいかないわけ。夜は選別をして、それが終わったらご飯でした。作業が終わるのが9時、10時の時もありました。そのあと次の日お父さん（夫）はすぐ市場に行きましたよ。

家事は主におばあちゃんが

主人の父親はいなかったんですけど、主人の母親がいたんです。私は子供が生まれるまでは働いて、家事は主におばあちゃんがやってくれました。朝は私がお掃除して、主人の兄弟、青森からの住み込みの子と合わせて8、9人分のご飯の支度をしていました。その後私は畑で仕事をして、ご飯の片づけは母親がしてくれましたね。母親は元気でしたからね。朝は私の担当ですけども、お昼とか夜は母親がご飯の支度をしてくれました。子供ができてからも子供の面倒とかも見てくれたりして助かりました。

円山朝市で売って、必要なものを買って帰った

今は販売用の野菜は中央卸売市場のせりで売っています。昔と違ってせり一本ではなくって、前の日に契約というか予約することもあります。昔は朝市で、相対（あいたい）売りというのかしら、自分で直接相手の方といくらで売る、いくらで売ってほしい、ってお互いで交渉していました。昔は円山朝市って言っていました。市場一本になったのは昭和40年代だったと思うんですよね。町の人がキャベツ1個くださいっていうのではなくて、あくまでも卸で、商売の方が買い付けに来ていました。そこには衣料品、家庭の道具、洗濯洗剤、お鍋、おかず屋さんだとかいろんなお店がありました。農家の人は自分のものも売るけど、自分の必要なものをそこで買って帰れました。車で円山まで行っていたんですが、車の時代の前は馬で行っていたようですね。

昭和50年代にハウスが増えました

私が小別沢に来たころハウスは全然なくて、昭和50年代にだんだんと増えていきました。作るものが重量野菜なんですよね、手もかかって重いので労力的な問題でハウスで集約してやったんだと思います。ハウスだと菜っ葉系のものも作っていましたからね、きゅうりとかトマトを作っても1回しか取れないでしょ。ハウスだと例えば、昔なら三つ葉、春菊、ホウレンソウを作ったり、そういうものだと何回かとれるんです。また植えて、また耕して、種まいてまたとるの。最初の頃はハウスもやりながら畑も作っていたんですけど、だんだん歳をとってきて体力的に畑の方ができなくなってきたの。

馬って生き物ですからね

機械は、畑のと、ハウスのと、あと消毒の機械、耕運機、大小合わせて5、6台ありますね。昔は機械を使わないで農業をやっていました。私が小別沢に来る前の昭和30年代くらいから機械が入ってきました。昔は馬。農家はどこのうちにも馬がいましたよ。車が入ってきた頃の昭和30年半ばくらいかしらね、馬から機械に代わって畑をおこし始めました。

作業内容としては同じですけども、馬って生き物ですからね、生き物を扱うっていうのは大変なのね。ご飯を食べさせなきゃいけないし、水も飲ませてあげたり、体調を見たりとか、馬だって病気するから獣医さんにもかけなきゃいけないし、機械だと故障はありますけど、生き物と違ってそういう面では精神的にも楽になりましたね。あのころ馬も結構高いですしね、馬が病気になって死んでしま

ったら農家にとっても大打撃ですから。

子供にすまなかったなと今でも思っています

だんだんと近所に町の暮らしをする家が増えてきて、休日遊びに連れて行ってくれないだとか、私の子供はその違いを感じていたと思います。私も感じていました。子供がどこかへ行くって言っても ね、自分が忙しいから私は早く早くって言って、子供を急かしてきたような気がするんです。常に私忙しさに急かされてそういう風に言っていました。子供が何かやっていることをもう少しじっくり待って見てあげられなかったのかなって、すまなかったな、かわいそうなことをしたんじゃないかなっ今でも思っています。

日曜日とか夏休みですよね、学校行って来たら他の家の子がどこ行ってきただとか話聞くでしょ。どこかへ行くっていうのは仕事のことがあったりで何か月も前から予定は立てられないでしょ。子供を遊びに連れて行ってやりたいなって思いましたよ。よそがこうだからうちもっていう風に同じにしなきゃいけないってわけじゃないんですけどね。

ここね、昔車のない方が、向こうの住宅街から子供さんを連れてうちの方を歩いて動物園に行くんですよ。それは辛かったです。歩いていくのを見ている子どもがかわいそうだなって、私が辛かったですね。お母さんが子どもを連れて、お隣のご近所でお友達連れて誘い合って歩いてくのを見るのが辛かったですね。それを見て子供が一度私も行きたいって泣いたんです。その時は私も涙が出ました。

だから私はもう、子どもの行事には絶対行くって割り切りました。普段してあげられないことがいっぱいありますから、それだけは絶対行きました。遊びに行くっていう計画はなかなか立てづらいけど学校行くのは何月何日何時って事前に分かってるわけでしょ。だから自分でこの日は行くって決めてました。おばあちゃんとか周りも全然何も言いませんでしたからね。

町内会で海水浴に行きました

町内会の行事とか、農協の女性部の集まりとかは集まるけど、個人的にお茶しようとかは無いですね。町内会には、最初のうちは参加しないで、子供がある程度大きくなって留守番できるようになってから、お父さんと行くようになりました。新年会、花見、そして観楓会（かんぷう）、あと昔は海水浴がありました。農家だから海水浴になんか連れて行かれないから、町内会でそういう企画を打って子供を連れて行ったんだけど、子供たちが大きくなったらだんだん参加しなくなってその行事が無くなったんですよね。今は三つ、新年会、お花見、観楓会。小別沢の会館に集まってやります。良い交流ですね。

鉄砲漬けを作って人にあげていました

キュウリとかナスとかウリを鉄砲漬けしたんですよ。鉄砲漬けは売ってないから自分で作らなきゃいけないの。大体の大きさになったら収穫して、中をくりぬいて、塩漬けして、秋になったら塩出しして、その中にニンジンとかゴボウとかシソの実を入れたりしてそれをかす漬けしたの。でもそれは手間がかかるの。自分んちで食べるっていうよりも、結構人んちにあげてたの。結構喜ばれてたんで

す。うちのお父さん神宮に行くでしょ、だからその時にお昼食べるのに毎日お漬物、人にも皆にほとんどあげてたから、いろんなもの漬けましたよ。おいしいって言われたら嬉しくなっちゃって、あげたくなっちゃって、ほとんど人にあげてたの。

小別沢のこれから

跡取りがもっといて若い人たちが活性化してくれるといいですね。そういう家も2軒ありますけど、それはもう望めないことなんでね。ただここにちょっとね、教育的な施設でもできたら良いかなって思います。開発のされ方ですよね、自然は自然で残して、教育的な施設ができたら良い環境になると思う。この地域の人は何代にもわたって住んでるんだから、それなりの思い出とかありますしね。だから変な開発されるのは誰だって嫌じゃないですか。

（構成／鈴木翔子）

親の手伝いをしないと、げんこつが飛んできた

漆崎 智（さとる）さん（昭和18［1943］年生まれ）

遊んでる暇ないんだよな

農業は生活のためだな。作っているのは、小松菜が一番多くて、あとは大根としろ菜、葉取大根。畑は、ピーマン、ししとう。南蛮が少々。あと、とうきび、かぼちゃ。

俺の3代前は雑穀づくりだった。大豆とか、裸麦とか。俺が中学生のころくらいから、トマト、キュウリ、ナスを作りはじめた。学校から帰ってきたらトマトとれとかキュウリとれとか言われてたな。そのころ馬鈴薯の種イモもつくってた。トマト、キュウリ、ナスはみんな産地が広がって、ロットが小さい「個人出し」だとちょぼちょぼしか出ない。スーパーは出荷数多いから採算取れなくなって。それで、昭和30年代終わりごろに他の人が作ってない小松菜なんかもつくりはじめた。

収穫までは、春先だと小松菜で45日から50日。3月の頭にはもう蒔けるから種蒔いて、菜っ葉がとれはじめて収穫したらまたおこして種まいて。弱いハウスは4回、ちょっと丈夫なハウスは5回。その間に虫予防もしなきゃいけないし、結構忙しいんだよ、遊んでる暇ないんだよな。自分の苗は自分

で作るけど、昔は、作った苗を中央市場で売ってたんだ。

子供のころからこのへんは一面畑。沢は田んぼな。家の前の山の手高校のグラウンドも、田んぼだった。田んぼからは自分の家の分としては余るくらい穫れた。沢の田んぼだから、6俵半かな。よくとれて8俵くらい。結構味はよかったよ。西野の米って高いんだ。泥炭地の田んぼからとれるからうまい。小別沢は石、砂利の田んぼだ。畑は粘土質が多いな。

朝市は眠たくて眠たくて

円山市場へ行くようになったのは、免許を取ってからかな。たまに面白がってついていくと、朝市に午前1時30分に行ったから眠たくて眠たくて。俺が行ったのは昔の北6条、7条西28丁目にあった市場。昔警察署があったところ。北6条と7条で組合員の構成が違った。北海道博覧会（1982年）の後に中央市場が出来るまで札幌市内の商品が全部円山市場に集まっていた。

市場に行く以外で市街地に出てくることはなかったなあ。ずっと電車の終点まで歩いて行かなきゃならなかったから。西野にバスが入ったのはだいぶあとになってから。宮の森ジャンプ台ができたころはちっこいバスが走っていた。子供のころは自転車を三角乗りして街に出ていた。ブレーキがよく効かないから、暗くなると自転車ぶん投げてた。道が舗装されたのはだいぶあと。

子供は労働力だった

三人兄弟の、幸か不幸か長男。故郷、生まれ、育ち、ずっとここ。出ていきたくても出ていけなか

ったべな。俺は学校に行かしてもらったけど、子供は従業員みたいなものだった。親の手伝いしないと、貧しかったから食っていけなかった。

親の手伝いは、力がついて物が持てるようになったらすぐ始めた。しないと、げんこつ飛んで来たもん。遊んで帰ったらね、隣の子が先に帰ってると、「お前遊んできただろ」ってすぐ怒られた。トマトもいだり、キュウリもいだり、なすびとったり、田んぼの稲刈ったり。子供は労働力だった。

手伝いはみんなつらくて、遊びたかった。最初はトマトもげって親父に言われたんだけど、遊んで帰ってきて暗くなったら大きさはわかるけど、赤さ、熟しているかわからないでしょ。結果、青いトマトも赤いトマトも残ってる。それで親父考えてな、今度はキュウリとれっていうんだ。あれなら暗くなってもわかる。

食べ物は野菜だけじゃなくて魚も獲って食べていた。うまくないけどな。冬になったら山で野ウサギとってた。朝見たら罠にかかってカチンコチンに凍ってる。血抜きしてないから煮るとあぶくがいっぱい出るんだ。あんまりうまくねえわな。

運動会はお祭り騒ぎ

小学校は盤渓小学校。小学校の運動会は、足遅かったからいい思い出ないなぁ。父兄も参加する小中合同の運動会だった。商品はよかったぞ。ノートや鉛筆もらったり、新聞社がメダルをくれたり。大人も徒競走や綱引きに参加してすごい盛り上がっていた。ビールの早飲みもあった。あれはお祭りだよな。

中学校は琴似中学校盤渓分校。盤渓中学校になったのは卒業後。どの家でも中学卒業後、長男はここに残って、畑をやらない次男三男は仕事を求めて町に出て行った。女の子は嫁に行くまで農作業を手伝っていた。だんだん町の方に出て行って、今残っている純農は6軒か。

中学校出た後は、野幌の農業科に行った。今の野幌高校の前身だ。季節制定時って言って、4年間行くの。冬から春まで行って、農作業のころは休みになって。夏は1か月行けば休み。7月末くらいからひと月行って休みになるの。休みの期間に家の農作業をした。

寄り道しながら学校へ

小・中学校へは徒歩で通って、会館の前を通って行った。札幌医大の和田寿郎先生の山に生えてた山イチゴを食べながら。冬になったらみんなスキーはいて学校に通ってたな。

イチゴを食べながらだったり、虫取りしながらだったり、寄り道すると1時間かかっちゃう。クワガタにもいろいろあるからさ。「これは兵隊だ、これは義経だ」って名前付けて。田んぼあったから蛍もいたしな。蛍なんかいっぱいいたぞ。

カニをとって食べていた

大きい川で川遊びしてた。溺れちゃってから水が嫌になって泳げなくなったけどな。カワカジカとったり、ドジョウとったり、ヤツメウナギとったり。毛の生えたカニもいたし。土手のところに穴掘って、軍手さしこんでカチッて食わせて捕った。お菓子なんてないから食糧。おやつは芋とかぼち

や。魚の釣り針買えないから、マチ針をまげてな、ミミズはどっさりいるからミミズを木綿糸でくくり付けて。返しがないからすぐ逃げられて。それからな、ニホンザリガニ。そこの沢にもいたんだ。俺が子供のころ、川のふちに、風呂があったんだ。風呂に入りながらザリガニがとれたもんだぞ。

田舎芝居やらあったぞ。盤渓小学校に集まってな。俺が17歳くらいのころまで小学校の近くに神社があった。バイクに乗って見に行ったよ。大昔は青年団がやっていた。小別沢には神社がないから、小別沢の人たちはみんな出向いて行った。今ある御岳神社は後からできたんだ。トンネル神社っていう小さい神社があったけど、元の大きな社は盤渓にあった。

水車で発電

俺が生まれたころは、電気は水車の自家発電でやってた。ランプ使ってたのはほんとの子供のころ。盤渓小学校に電池を運んで充電していた。あとで山のところに風力発電が出来た。運動会のときは、3つか4つバッテリーを円山まで下ろして充電した。重たいから3人か4人で台車に載せて運んで行った。下りにさしかかるとブレーキがないからひっくり返したりしてな。

発寒川の水車は父親が管理してた。落葉が樋につまらないように取り除いたりして。水車で作った電気は小別沢全体に行きわたっていた。1軒につき、電気は1個か2個つけるくらいの容量しかなかったな。

暗い防空壕

戦争のときは、飛行機がとぶと、孫ばあさんが暗い防空壕の中にすぐ連れてってくれた。小別沢でも防空壕みんな持ってたから。結構飛んでたんだ、飛行機。

昔は貧しい生活だった。それこそ漬物と味噌つゆの生活だから。魚買うって言ったら二条市場まで歩いていかねばならなかったからな。行商の人が小別沢に来るようになってからは魚も食べるようになったけど。その時代も畑が中心で、カボチャやトマト、秋大根、根菜類が多かった。終戦後は食糧難で、馬鈴薯が多かった。

トンネルと山火事

トンネルができたのはだいぶ昔で、俺が子供のころにはもうあった。伊部さんのおじいさんが掘削を願い出たんだ。トンネル通るときは怖かった。あそこで首吊りやった人見たもん。名所なんだ、昔から。動物園横の林の中にユースホステルがあって、そこから死にたい人が歩いてくる。アベックも日曜日にはいっぱいいた。市電の終点から歩く散歩コースだった。

山火事はだいぶあったぞ。毎年春になったら燃えてたもん。ここらへんだと大沢さんとこの向かいが焼けたのが最後だな。もう二、三十年経つかな。昔は消防車なんか来ないから自分らで消したんだ。山に防火線って言って、草刈って幅をつくる。そしたら、燃えてる反対側から火つけて、向かい火にするとこっちに火が来ない。そういう火の消し方したの。

（構成／小森安奈）

漆崎あい子さん（昭和24［1949］年生まれ）
16歳のときに青森から来ました

もう50年近く小別沢に住んでいる

昔、小別沢から田舎（青森）へ農協の方から農作業の手伝いの募集があってね。友達が北海道に来てたからそのつてで私も来たんだ。行こうと決めたときは、親は口には出さなかったけどそばにいてほしかったみたいだね。昭和40年頃、16歳で来てからずっとだから、もう50年近く住んでるかな。当時は、冬になるとみんな帰るんだけど、私は八百屋さんの手伝いをして残ってね。来た当初から、地元に帰らないで働き続けようと思ってたね。

春は農家、冬は八百屋で

小別沢の農家（橋場さん）に住み込みで働いてたよ。主に、春から秋はトマトやキュウリを作っていたよ。橋場さんのところで手伝っていた人には、同じ部落の人も何人かいたり、まったく知らない人もいたね。若い女の子が4人くらい働いていた。男の子が手伝いに来ていた農家もいたね。

ご飯は住み込み先の家族とみんなで一緒に食べてたよ。朝早くから夕方まで働いて、暗くなってか

ら選別作業をしたね。決まった休みというのはなかったけど、市場が休みのときは休みだった。毎週休みがあるわけではなかった。今だって、市場が休みだからと言っても他の仕事があるからね。だから休みは花見とかお盆のときくらいかな。

冬は円山市場の八百屋さんで住み込みで働いてたね。春になったらまた小別沢に戻ってきて農家の手伝いをしてた。この暮らしは5～6年やってたかな。

円山市場はいろんなものが入ってきて栄えていたよ。土日は特に人の出入りが多かったね。円山市場の中の八百屋さんでバイトしてたね。他にも何人か同じように住み込みで働いている人がいた。私はお店の売り子さんとか仕入れてきた商品を並べたりだとかしてたよ。昔は、今みたいにレジもないから量り売りしてたね。

それまでは顔も知らなかった

小別沢に来てから5年くらい経った21歳頃に結婚した。出会いはお見合いになるのかなぁ。知り合いに引き合わされて。それまで顔も知らなかったよ。

結婚してからも農作業のきつさは大して変わらなかった。結婚した時にも、農作業のお手伝いの人が一人いたかな。周り近所の奥さん方に手伝いをお願いして仕事が回せるようになってから、田舎から農作業の手伝い募集をしなくなったね。それからは手伝いの人の出入りはほとんどなくなったかな。今は、家族だけで農作業してる。

いろいろな野菜を作った

結婚したころは、畑でトマト、キュウリ、ナスを作ったり、秋になったら三つ葉を作っていたよ。作ったものは全部中央市場に出していた。水田も、自分のところで食べる分だけだけど、1反ぐらいあった。今はもう作ってないで買ってるけどね。三つ葉はお盆くらいに種を蒔いて秋になったら一回収穫して出荷して、そのままにしといて春になったらもう一回収穫していた。

そのあとは他の作物を植えてまたお盆くらいになったら三つ葉の種を蒔いてた。ほとんどの農家は三つ葉を作ってたんでないかな。そのあとは春菊とかネギも作ってたね。でも連作障害が起きて春菊が倒れてだめになってきてからは、春菊をやめて、葉ネギとかを作るようになったね。ハウスの中では定番の小松菜、白菜、大根菜を作っている。小別沢の他の農家さんは白菜や大根菜を作っている人はあんまりいなくて、小松菜を作っている人が多いかな。小別沢の小松菜は、学校給食とかにも出してる。あとはキュウリだとかナスだとかトマトだとかが多かった。北広島まで車で行って親戚の畑を借りて大根や白菜を作ってたこともあった。小別沢は土地が限られているし、畑は粘土だから良い大根が作れない。だから、北広島の畑があるっていうから何年か借りて作っていたね。

とったやつは農協の選果場に出してた。出来のいいものしか出せないから経費の割に儲からなくて大変だった。仕事始めは2月の中頃からで、雪をよけて、ハウスにビニールかけるところから。昔の農機具は、テイラーみたいのはあったね。トラクターだとか、今みたいな大きな機械はなかった。畑は石が多くてね。全部片付けても堀起こしたらまだ石はある。

無人販売所　宣伝は何もしてない

無人販売所の商品は全部私が作っている。もう10年以上してるね。町中から買い付けに来ている人もいるみたいだね。小樽や中島公園から料理屋さんが買いにきたりもしてるね。ほとんど午前中で売り切れちゃう。その日に売れ残った葉物は、次の日に半値で出したりしてる。葉物目当てに早く来てる人もいる。一つ一つパッケージして大きさごとに値段も変えてる。

今は、売店用にはいろんな種類を作っているね。たとえば、春先からルッコラだとか、パクチーだとか、一昨年あたりから赤茎水菜を作っているね。あとはワサビ菜を作ったりしてる。カタログを見て、変わっていていいな、やってみようかなって思ったものを作ってみる。今年は作らなかったけど、かつお菜やコールラビや、周りが青くて中が真っ赤な大根を作ったりもした。

宣伝は何もしてない。インターネットの口コミで見たり、友達に聞いてきたって人がいるね。あとは、うちのとうきびが美味しいって聞いて来たって人もいたね。

北海道はこまいものを作るから手がかかる

出身は、青森県のバスも通っていないような山の中にある枌木（こぼのき）（青森県上北郡東北町）ってところでね。水田とか菜種とか煙草を作っていて手伝ってたよ。小別沢と枌ノ木の農業は全然違う。まず作るものが違う。やっぱり北海道はこまいものを作るから手がかかる。田舎は雑穀だとか豆類だとか菜種だとかを作ってたからあんまり手がかからない。食べてるものは地元にいたころとたいして変わらないんでないかな。でも、地元はジャガイモをご飯の中に入れて炊いたり、粟だとか食べてた。北海道は粟

だとか作ってないからね。ご飯は白米で特に何か入れたりはしてなかった。

息子は四代目

息子は跡取りで四代目だね。息子の方から農家をやるって言った。北海道にある土木の会社に勤めて3年くらいで帰ってきた。私からは特に何も言わなかった。他に上に二人娘がいる。長女は一緒に住んでる。次女は福井にいるし、仕事手伝いに来てくれてる。孫も一緒に住んでいるよ。同じ家に住んでるけど、話す時間は農業してるとあんまり取れないね。娘方の孫は農業の手伝いはしないね。息子方の孫は、後継ぐつもりなのか、農業を手伝ってるみたいだね。子供が農業を手伝ってるのは珍しいかもね。

民謡　若い人にもやってほしい

歌は結婚して子供が大きくなってから覚え始めたね。一番最初は、小別沢会館でじいちゃん、ばあちゃん方がやっててね。先生が北広島から夫婦で来てくれて教えてくれてね。小別沢会館で教わったのは一冬だけで、あとは、子供たちが幼稚園終わりになってから、本格的に福井会館（西区福井）に習いに行ってたね。福井会館も、先生が来てくれて一週間に1回、月に3回教えてくれる。追分は追分の先生で、民謡は歌と三味線を同じ先生が教えてくれる。歌が一つの息抜きになってるね。歌の他に三味線もする。小別沢で習ってる人は私だけだね。盤渓からは3人で、全部で10人ぐらい。

他にも私は三味線の団体に入ってる。年何回か大会もあって、十勝へ行ったり留萌の向こうにも、

本州にも行った。

昔は孫たちもみんな歌やったり、娘は太鼓やってたりしてたんだけど、やめちゃってね。娘は三味線だけ続けてるけど、それもそろそろやめちゃうみたいだね。でもそういうのをやっとくと、年寄りのところに慰問に行くと喜んでくれるからいいなって思ってたんだけどね。一人やめるって言ったらみんなそろってやめてしまってね。若い子に民謡だとか三味線だとかやってほしいなとは思うけどね。でも、中学入ったら、部活とか受験とかで、若い人は減っていく一方でね。それに自分の孫たちがやめてるから、よその子供に声かけるわけにもいかないし。若い子は、全然声が違うから、面白いと思うんだけどな。孫たちにも自分が元気なうちに、またやってほしいんだけど、なかなか難しいね。

（構成／北浦彩由奈）

橋場 操（みさお）さん（昭和8［1933］年生まれ）

ずっと2、3時間しか寝ないような生活が続いたよ

ずっと小別沢に住んでいるの

私はずっと小別沢に住んでいて、小別沢を出たのも、若い時にいとこに頼まれて当別に水田農家のお手伝いに行っていたことがあるだけだね。

家族は父親、母親、8人の子供、おばあちゃん、孫爺さんで一緒に住んでいたけど、父親が早くに亡くなったの。それで母親が一人になったし、当時盤渓には中学校がなかったから、私は小学校卒業した後中学校行かずにずっと水田を手伝ってたよ。

兄弟の仲は良くて、一緒に学校に通ったり遊んだりしていたよ。私は上から二番目で、一番上のお姉さんと一緒に下の子たちの面倒見たりしたね。末っ子は今66歳で一番上が84歳だから、歳はけっこ

う離れてるね。

今年で結婚60周年です

お父さん（夫）は丘珠（おかだま）（東区丘珠）出身で、タマネギ農家をやってたの。小学5年生で小別沢に来てからは農家をして、リンゴやサクランボや野菜を市場に出してたね。私とお父さんは歳が2つ離れてて小学校は1年しかかぶってないから、学校にいるときは付き合いはなかったね。お父さんの小学校は手稲東で、中学校は手稲中だったかな。

知り合ったのは青年団で集まりがあった時で、結婚したのは昭和29年だね。当時は青年団の活動が盛んで、バレーボールの同好会とかがあったよ。今も農協に青年部があって、弟（伊部義幸さん）が入ってるけど、ソフトボールとか、いろんなゲームがあるみたいですよ。

お父さんは江戸さんと兄弟で、私も江戸さんと親戚だから、私たちはそのつながりで知り合ったんですよ。小別沢はみんな親戚同士ですのさ。

今家があるここは、結婚した年には、お父さんが一人で住んでいたのさ。はじめは馬飼って、馬小屋みたいな形で住んでた。そのあと、田んぼを作って、開墾したところに家を建てたんです。相当な苦労でしたよ。今年で結婚してもう60年になります。

ずっと2〜3時間しか寝ない生活が続いた

作った野菜は円山朝市に立ち売りに行ってたの。朝2時頃に馬で行って、帰ったら朝8時くらいだ

ったね。その後午前中は次の日の準備をして、夕方には収穫作業をしてっていう一日だった。当時は10月いっぱいまで朝市に出して、収穫作業と水田もやってたから、夏の間はずーっと2〜3時間しか寝ないような生活が続いたよ。

2月になったらハウスを始めるから、冬も2か月くらいしか休めないですよ。冬は女は家事中心で、大根、キュウリの粕漬、白菜とかの漬物を作ってたよ。小別沢の漬物は売りには出してなかったけど有名でしたよ。私の母親がすごく作るのがうまくてね。

昔はなんにもなくて、食べ物ったら漬物と煮物くらいでしたよ。粟とか稲きびとか小豆を、自分で作った麦の麦ごはんにかけて食べてたね。魚を食べたのは、週に1回小樽から業者が来た時だけだったね。肉は家で飼ってた豚を正月にしめて食べてた。うさぎとかスズメを食べたって人もいたし、なんでも食べてたね。

農繁期は忙しかったから、うちでは青森から農業の季節労働者を頼んでたの。農協で季節労働者を青森に頼みに行って、小別沢に10人くらい来て、各戸に1人くらいずつばらけていったんだよ。小別沢では季節労働者と結婚してる人が何人かいるよ。私たちより下の世代の佐藤さん、田中さん、漆崎さん、江戸さんだね。その中でも佐藤さんと漆崎さんの奥さんはうちの家から嫁に行ったんです。来ていた季節労働者に娘（三輪寿子さん）を預けたら、乳を飲ませてくれたりしたこともあったね。

家畜は、馬を1頭と、卵をとるために鶏を2〜3羽と、正月に食べるための豚を飼ってたね。結婚してからは綿羊も1匹飼ってたけど、交通事故に遭っちゃったの。くっついて歩くからかわいかったんだけどね。農協で作ってくれた羊毛の服が残ってますよ。

男も女も関係なく遊んだ

当時の学校の校舎は、床も抜けるし、トイレもすごかったですよ、汲み取りでね。掃除のときには、冬は学校の廊下に雪を入れて廊下を磨いてたね。あと、ストーブも私らの時は薪だったんじゃないかな。学校で持っている山に地域の人が伐りに行って持ち寄ってたよ。家の薪はそれぞれの家で持っていた山に自分たちで伐りに行ってたけどね。

当時は学校給食もなくてお弁当だったね。娘にも小4まではお弁当作ってたよ。給食が始まったのは孫のときだね。

登校するにもひと山越えないといけないから、冬の間はスキーがないと行けなくて、1年生からスキーを履いて、男も女も関係なしにかたまって登校したよ。夏は夏で坂だから大変だったけどね。

スキーでグランドを走ったり競争したりもしましたよ。当時のスキー板は木でできてて、真ん中に金具がついて、足をビンディングで横でカチンと止めるようになってたの。馬そりも遊びに使ってたよ。大きい馬そりを友達5、6人でロープ付けて押して、引っ張って坂から滑って遊んだんですよ。男も女もなかったね。

夏は公園で、木でブランコ作ったり、縄で縄跳び作ったりしてそれで遊びました。川でドジョウとかカニ（ザリガニ）をとって遊んだり、あやとりとかおはじきをしたりもしましたよ。

地域の集まりもいろいろあった

盤渓小学校で9月ごろにお祭りがあって、子供から大人までみんな集まって、青年部も一緒にやってたのさ。

6月頃には運動会もありました。農家の収穫期が終わってから、9月ごろにやった年もありましたけどね。大人も子供もみんな参加して、小別沢とか盤渓とかの部落対抗で盛大にやりましたよ。部落対抗のリレーでは、小別沢の住人はすごくみんな速かったですよ。

小別沢の婦人会は琴似農協に入ってて、琴似農協の合同の婦人会は今も定山渓で年1回、「婦人のつどい」っていう名前でやってます。小別沢とか福井とか、農協に入ってる地区が何地区も定山渓に集まって、料理を習うんです。ついこの間も定山渓ビューホテルであったから行ってきたんですよ。婦人会は昔からあるから、来てる人は昔からの知り合いなの。前は、小別沢の婦人会だけでも小別沢会館で集まって漬物とか味噌とか作ったりしてたけど、今はやめた。みんな年も取ったし、親たちも亡くなったからね。

娘が農家を手伝うって言ってくれたの

私が怪我して入院していた時に、内地にいた娘が、お父さん一人で家においてたらだめだからって言ってこっちに戻ってきたの。その後、お父さんが胃がんで倒れて、よくなって帰ってきた年の正月に脳梗塞でまた倒れて、もう農家できないってなった。そしたら娘が、全然農家なんてしたことなかったんだけど、手伝うって言ってくれたの。

だから今は農業は娘と2人でやってます。たまに友達が手伝ってくれるから、お手伝いの人も頼んでないね。畑の面積は全部で4町5反で、そのうち今使ってるのは8反だね。全部はできないし、荒らしたらいけないから減らしたの。ハウスで弟と一緒に小松菜を作ったり、個人で知り合いに貸したりもしてるね。あとは去年からお父さんのいとこに畑を動かしてもらってもいる。

土地を売りたいのに売れない

私たちの子は2人とも女の子で嫁にやったから後継ぎがいないし、私らも年が年だし、娘もいずれ水戸に帰らんならんから、結局は橋場家が絶えてしまうでしょ。だから畑は売りたいと思って農協にもお願いしたんだけど、なかなか売れないね。土地は農協を通さないことには売れないんだって。

橋から向こうの福井は調整区域（市街地調整区域）でないけど、小別沢は調整区域なんです。だから小別沢の景色は昔からあまり変わってないけど、橋から向こうは町になって大きく変わったね。ほんとは、小別沢の土地も調整区域がなかったらすぐ売れたんですよ。でも、札幌市は緑がなくなるからって言って指定を絶対外さないのさ。土地を売りたくても売れないから、調整区域は外してほしいね。外したらすぐに土地を分けてくれないかっていう人がいっぱいいるんだけどね。

住めば都だね

小別沢の昔と今で変わったことは色々あるよ。トンネルもできたし、道路も舗装されたし、電気も水道も入ったし、発寒方面の橋も変わったんですよ。

昔は道路も砂利道で、電気もなくてランプ生活で、どれだけ苦労したか分からないですよ。仕事して夜帰ったらランプがあって、馬もいて、ランプが無かったらろうそく立ててってしてたねえ。電気がついたのはまだ私が嫁に来てないときで、父親が昔町会議員やってたから、その関係でお願いして電気を通してもらったんですよ。水道もなかったからポンプで汲み上げてたの。私たちの小さいときはポンプもなくて、沢から水汲んで使ってました。

でも景色はあまり変わってないですね。道路を広げたりそれぞれが持ってる山で木を切って明るくなって、トンネルも橋も新しくなって、昔よりいくらか広くはなったけどね。

小別沢は住めば都だね。婦人会で旅行に行くと、みんなして「やっぱり我が家がいいね」って言って帰ってくるんですよ。

（構成／原口桃乃）

三輪寿子さん（昭和34［1959］年生まれ）

小さいながらも大根を積んでトラクターを動かしていました

助けてくれ、ここだあ

盤渓小学校に小学校3年生まで通ってました。山二つ越えて、冬はスキーで通学しないと埋まっちゃうので、だから冬はすごいですよ。朝6時とか6時半に順番に下の人から行こう行こうって一緒に。低学年を間にはさんでみんなで行く。帰りも低学年を間にはさんで帰ってくるけど、必ず最後つくと誰か一人くらいいない。小学校1、2年生だとスキーの操作が達者じゃないから曲がり切れないんですよ。逆側は崖があって川。川に行くまでには木が立ってるからそこにひっかかってたりする。助けてくれ、ここだあって聞こえてきて、あ、いたいたって6年生とかが助けに行く。

盤渓小では勉強は半年間しかしないんですよ。残りの半年はほとんどとなりの盤渓のスキー場でスキーとか。クロスカントリーの大会に出て男の子と一緒に戦って一等賞とりました。学校時代は楽し

かったですよ。だってそんな感じで、半年勉強したら、残り半分はドッジボールやったり、バスケットボールやったり、あとはほとんどスキー。

運動会

運動会なんかも学校だけでなく、それぞれの住んでるとこの部落の人も総出の一大行事でした。すごい楽しかった。リレーの選手とかもどこどこのお父さんとか出てね。子供のいない家も来てた。運動会は農作業も終盤にかかった秋。私たちのころは、運動会の時にバナナを食べられる。それも房で買ってもらえる。今でこそバナナいつでもどこでも安く食べられるけど、私たちのころは、運動会はバナナが食べられる行事だった。

海水浴もありました。町内会全員参加の一大イベントでした。大人も遊びたかったんじゃないですか。浜で酒盛りして、今ならありえないですけどね。一大イベントで子供ながらに楽しかった。地域の子供も全員でした。

しもやけは日常茶飯事

冬は金属の湯たんぽで、やけどしないように袋に入れて寝るんだけど、寝てる間ってどうなってるかわかんないから、必ずやけどするのね。ゆたんぽのやけどって結構深いんですよ、何か所もありますねやけどの跡。

しもやけは日常茶飯事。今みたいに靴の素材もよくないじゃないですか。足が冷たいところに長時

間、長靴とくっついてたりするとしもやけになって。薬もそんないいのあるかって言ったら、「雪の元」くらい。だんだんあったまってくると、かゆくてかゆくて我慢できなくなるね。

自然の中で遊んだ

カンダハンって知ってます？　昔のスキーは、長靴で皮のやつで止めて、下駄はくみたいに、板は木で、それ履いて通ってたのよね。

竹馬は父が作ってくれた。だんだん低いと物足りないから、どんどん高くなってくのね。でも田舎の子だから、どれだけ高くてもどんどん走れちゃう。あとはおっきな木があったら、ブランコ作ったりとかね。昔はクワガタが普通に飛んでくるんで、木のところに穴あけて、脱脂綿に砂糖水つけて入れておくと飛んでくるの。

うちはやってないけどうちの近くに田んぼがあったんで、春になるとオタマジャクシが卵産むんです。それぞれのカエルの種類によって長い卵だったり、うじゃうじゃしてたり。それをバケツにすくって持ってくるんですよ、で、すごい怒られるの、そんなの持ってくんなって。そのまんまにしとくと孵化してカエルになっちゃうから。川でザリガニとったりとか、とること自体が遊び。昔は福井の端で、水止めて水遊びしたんですよ。

自然の中で十分遊べた。林の中とか山の中とかいろんなとこ入って2、3日したら、なんか首のとこ痛いと思って親に言うとダニついてるって言われて。まだ血を吸う前で食いついたときはちっちゃすぎてわかんないけど、血吸って、丸くなって大きくなってるの。こんな体験、田舎じゃなきゃでき

ないよね。

ちっちゃいながらもトラクター運転

手伝いしないとおこづかいあげないという親だったんで、ちっちゃいころからトラクターとか運転させられましたよ。ちっちゃいながらも大根を積んでトラクターを動かしてました。小学生くらいの時の学校休みの時に、夜おそくまでライトつけてやらされた。夏休みも遊びに行けないんですよ。手伝わないと、ごはん食べさせないとか、おこづかいあげないとか。

子供のころに欲しいものあるじゃないですか。私たちはカセットテープレコーダ欲しくて、夏休み手伝わないと買ってあげないって言われたら、友達のとことか遊びに行きたいんだけど手伝わざるを得ない。小学校の途中で大きな学校（手稲東小学校）に移ったから友達もたくさんできるし、ちょっと違う遊びも覚えるじゃないですか。例えば、お店行っておもちゃ見に行くとかウィンドーショッピングとかそんなしゃれたものじゃないけど、街行って楽しむこともできなくて、夏休みはひたすら手伝っていましたね。

中学校、高校は家の手伝いをしたくなくて、体育系クラブに入りました。夏休みとか合宿だ練習だっていって没頭してると手伝いしなくいいから。

雨の日が好きだった

嫁に行くのも絶対サラリーマンに行こうと思って。うちの父は妹と女の子二人なんでお婿さんを取

りたかったんですね。やっぱりどうしても農家を継いでほしかった。でも、絶対無理。大変だからさ。私は8月21日生まれなんですよ、一番忙しい時期じゃないですか、誕生日をまともにやってもらった記憶がない。みんなはお誕生日とかそれなりにやってるけど、私の場合は一番忙しい時期だから、収穫してきたものをLとかMとかSとかにより分けて、市場に出す作業をしなきゃいけないんだけど、夜中2時3時まで仕事続くから、とりあえずケーキとかは買ってきてくれるんだけど、家族全員で私の誕生日を祝った記憶がない。だからそういうのもあって、絶対農家はいや。幼心にさみしかったんじゃないんですか、たぶん。

ちっちゃいころなかなか家族そろって出かけるということはほんとになかったんで、うらやましくてしょうがなかった。子供心に。だから雨の日が好きなんですよ、どっかいってごはん食べてくるかって、雨の日は仕事できないじゃないですか、みんな家にいて、ミカン食べたりお菓子食べたり、それが楽しかった。

ハンバーグなんて食べたことなかった

町の学校には、なじむまでには時間がかかりましたね。何もかもが違うんですね、都会的とかまではいわないけど、お弁当の中身とかも。

信じられないかもしれないけど、本物のハンバーグって就職して社食で食べるまで食べたことなかったんですよ。社食で、これがハンバーグかと思って、食べたら意外とおいしいじゃんって、これが私の初ハンバーグで。田舎だからそういうものって食べないじゃないですか。

友達の誕生日に呼ばれて、びっくりする。田舎ではお誕生会に呼ばれてプレゼントを持っていくとかもないじゃないですか。何持ってくのか、から始まって、すごく神経使った。

農家に戻ってきている自分が不思議

私は、手伝いをさせられたっていうのもあるし、自由が利かなくなったというのもあって農家が嫌だった。うちの父とか母とか仕事しているのを見てて、朝早くから夜遅くまで仕事して大変じゃないですか。私はそれを見てるから農家がすごい嫌だったんですよ。だから農家とは関係ないお仕事を選んで就職して、サラリーマン見つけて結婚したんだけど、なぜか今私はトラクター動かして、ハウスの中おこして種まいて。どうしてこんなことになっちゃったんだろう。あれほどやだやだって言ってたのに、逃げれば追っかけてくるんですかね。やだやだって言ってたところにまた戻ってきてる自分、ちょっと不思議だなと思います。逃れられないのかなって。

農家も勉強しないとできない

昔は作物の収穫はしたけど、播種とかはやったことなかった。今は最初から最後まで。土づくりから始めて、どういう肥料が合うかとか水のやり具合はどこまでやるかとか奥が深いって感じですね。だから今自分で初めてやって親の大変さがわかりますよね。たかが農家されど農家ですよね。だからやっぱり農家も今、頭が悪くちゃできないと思う。作ったら今度販売しなきゃならない。どういう風にしたら売れるかとか、売るとこの販売先も変えたりしなくちゃいけない。子どものころはいやいや

ながらもできたものをただ収穫するだけでよかったけど、今実際に最初から最後までやると大変だったんだろうな。だから今の農家はそれなりに勉強しないとできないんだと思います。まだ今年2年目ですけど。

化学肥料とかもこの面積だとどのくらいの量入れなきゃいけないとか、自分で覚えたり、農協さんの勉強会に参加したりしています。昔の人って勘じゃないですか。どっちかというと私マニュアル人間なんで、無理って思って。実際にやってみたらわかるかなって感じです。

（構成／武石千里）

あとがき

この冊子は、北海道大学文学部の地域科学演習（担当・宮内泰介）という授業（ゼミナール）で、札幌市の小別沢地区のみなさんから聞いた話を聞き書きの形でまとめたものです。

小別沢地区は、札幌市の中心部からもそれほど遠くない位置にありながら、山に囲まれ、農村景観が広がる、小さな集落です。周辺はすでに宅地開発が進み、農地がほとんどなくなっているのに対し、この小別沢だけは、市街化調整区域だということもあって、農地も森林も残っています。この小別沢について、どんな歴史をたどってきたのか、どんな人が住んでいて、どんな営みをしているのか、私たちは知りたいと考えました。

ゼミでは、小別沢の歴史などについて事前勉強をし、さらに質問項目についてディスカッションをしたあと、小別沢での聞き取り（インタビュー）をさせていただきました。２０１５年11月から12月にかけて、小別沢の合計11名の方々にお話をうかがいました。この冊子で聞き書きを掲載したみなさんに加え、川股弘昇さん、スティーブン・ホジャティさんのお話も聞きました。インタビューのコーディネートはすべて小別沢の永田勝之さん（ＮＰＯあおいとり）にお願いしました。

実際の聞き取りは、学生2～3名が組になり、私やティーチングアシスタントの濱中聡志さん（ゼミ当時、大学院修士課程2年）もそれに加わって一緒に話を聞きました。

どの話も本当に興味深く、私たちが住む札幌の少し昔の生活の様子が活き活きと甦ってきました。うかがった話はすべてＩＣレコーダーに録音し、それを学生たちがすべて文字起こしし、そこから

「聞き書き」の形に編集しました。紙幅の関係で残念ながら削除した話もあります。さらに、みなさんの話を補足すべく、「小別沢の歴史」「円山市場とは」という学生の手による2つのコラムを加えました。

それらを最終的には、私の方で編集・推敲し直し、この冊子の形にまとめました。私自身の怠慢で、ゼミが終わってからこの冊子の発行まで1年以上かかってしまったことをお詫びいたします。

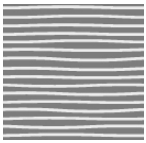
聞き取りに参加し、この冊子の作成に参加した学生は以下の通りです。

秦翊嘉、石磊蕾、青木彩峰、桑子凌太朗、佐藤凜太郎、西嶋真央、原口桃乃
日野陽平、七崎航、若松拓夢、北浦彩由奈、小森安奈、中田星矢、佐竹創
鈴木翔子、武石千里

なお、語り手の一人、橋場操さんが、学生たちに話をしてくださった翌月（2016年1月）、突然お亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈りいたします。

お話をしてくださったみなさん、ご協力いただいたみなさん、ありがとうございました。

北海道大学大学院文学研究科　教授　宮内泰介



北海道大学文学部・宮内泰介ゼミナール編集

聞き書き 小別沢

北海道札幌市小別沢地区の生活誌

発行日　2017 年 5 月 15 日
発行者　北海道大学大学院文学研究科　宮内泰介
060-0810 北海道札幌市北区北 10 条西 7丁目
電話 : 011-706-4150
miyauchi@let.hokudai.ac.jp
http://taimiyauchi.jimdo.com